断章
旭川のアイヌ語地名研究
(135)
高橋 基

―伊野川から忠別川までの地名㉔―
イペタムとアサムサクト(上)

今回と次回は、前回までの「ノチウ(nociw星)」の石狩川の対岸側にある「イペタム(ipe-tam物を食う・刀)」と「アサムサクト(asam-sak-to底を・欠く・沼)」の伝説について述べる。

安政四年(一八五七年)に石狩川を丸木舟で遡った松浦武四郎は、「ノチウ」は見ることができたが、対岸の内陸部にある写真の「イペタム」の岩は、見ることは出来なかったのである。

明治二十三年に旭川を調査した永田方正は、翌年発刊した『北海道蝦夷語地名解』で、「イペタム」について、次のように書いた。

イペタムシュマ(ibe tam shuma食刀岩)―「アイヌ」ノ小刀ニ似タル大岩アリ。高凡二丈(約六㍍)許、故ニ名ク。食刀トハ切レノ好キヲ云フ。

永田方正は、「イペタム」の意味は聞いたが、この岩にまつわる伝説は聞かなかったのである。ただ、エムシ(emus刀)との比較で、タム(tam刀)について、『世界第六十八号』に寄稿し、この「イペタムシュマ(食刀岩)」を紹介している。

昭和三十五年、知里真志保は、「上川郡アイヌ語地名解」で、「イペタム」と「アサムサクト」の伝説について、次のように説明をしている。

イペタム(ipe-tam物を食う・刀)―ここに刀剣の形をした二個の岩が立っている。昔、アイヌの家にイペタムと称する妖刀が二本あって種々の害をなしたので、ここにあった底無し沼へ持って行って捨てたのが岩に化したのだ。

アサムサクト(asam-sak-to底を・欠く・沼)―前記の底無し沼。今は底の浅い泥沼で一面に草が生えている。【註―現在は、全く水が無く、低地であるが、沼の面影はない】

これは、「イペタム」と「アサムサクト」の伝説についての簡潔な紹介である。

右の伝説は、昭和六年に、近江正一著『伝説の旭川及び其附近』に、「イペタムと水神の話」として流布するところとなった。しかし、知里真志保の伝承と少し異なるが、次のような内容である。

「イペタムと水神の話」―往昔上川アイヌの酋長の家に、古いキナ包みに入れられた名刀があったが、先祖代々「このキナ包みの名刀は、どんなに古くなっても開けて見てはいけない」と伝えられていた。

ある酋長の時代に、このキナ包みの名刀が妖光を放ち、コタンの家に飛んで行くとその家の者が、鋭い切り口で亡くなる事が続いた。そのようなことが度重なったので、酋長はその名刀を山の中や、石狩川の深みに捨てたが、必ず戻ってきた。いよいよ困っていると神が現れて、「ホトゥイパウシの下に沼があり、そこに巨岩があるので、これに祭壇を設けて一生懸命祈ったならば、この難儀より逃れる効験が見い出される」とお告げがあった。

イペタムとアサムサクト
(昭和62年撮影)

そこで酋長は、コタンの人々と巨岩に崇厳な祭壇を作り、熱誠な祈願をすると、巨岩は焔々たる炎を挙げて両方に裂けて、どこからともなくエコノンノ(原文註―エゾイタチの種類で、予言する山の神の使いが現れ、くわえていたクルミをアサムサクトに落とすと、波一つ無かった沼に、さざ波が立ったのである。

それを見て酋長は、例の名刀を捧げて、「水神であるあなたにこの妖刀を預けるので、その魔力を解き、ウタリ(同胞)をお救い下さい」と名刀をアサムサクトに投げ込んだ。すると、さざ波は消えて、その後コタンでは妖刀の難は無くなったという。

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します